

西田幾多郎の生命観

田路 慧

はじめに 「不思議なものは数あるうちに、人間以上の不思議はない。波白く海原をさえ、吹き荒れる南風を凌いで渡って行くもの、四辺に轟く高いうねりも乗り越えて。神々のうち、わけても賢い、朽ちせず撻みを知らぬ大地まで攻め悩まして、来る年ごとに、鋤き返しては、馬のやからで、耕しつける。(略)あるいは言語、あるいはまた風より早い考えごと、国を治める分別をも自ら覚る。または野天に眠り、大空の厳しい霜や、烈しい雨の矢の攻撃の避けおおせようも心得てから、万事を巧みにこなし、何事がさし迫ろうと、必ず術策をもって迎える。ただひとつ求め得ないのは、死を通れる道、難病を癒す手段は考え出したが。」

(ソボクレース『アンティゴネ』 呉 茂一訳)

われわれ人間は、道具を作り技術を磨き科学を発達させて、環境に適応しながら環境を変革形成支配せんと努力を続け、現在では高度の科学技術を持ち高度の文化文明を築き上げた。そして今や科学技術の牙先を生命の中枢に向け、不可避とされた老・病・死をも克服して、自己の運命と世界の支配者たらんとすらしているように見られる。特に近年の分子生物学や遺伝子工学なかんずく医療技術の目覚ましい発達には、運命と諦めざるをえなかった難病克服の可能性を指し示し、また差し迫った死をすら回避する道を切り開いて、難病や障害に苦しむ人々に大きな光明を与えるかのように見えている。しかし一方では新たに生じた脳死・臓器移植・体外受精・遺伝子操作などの問題

は、これまで自然なものの神秘的な人間の立ち入ることのできないものとして深く考慮することなく受け入れられてきた生命の問題に、人為の手が入ることに大きな不安と危惧を生みだし、あたりまえのこととして受け入れてきた生や死やいのちの問題にあらためて関心を呼び起こし、人々の死生観や生命観に大きなショックを与え、その再検討を迫ることとなった。はたしてこのまま人間の科学技術の手が自然の神秘・神の御業とされてきた生命の事柄、死や生、脳や遺伝子などに入り続けることは許されるのであろうか。人間の科学技術の限界ということを考えてみる時が来ているのではなからうか。原子核とともに生命の操作もその歯止めがきかず乱用された時、その影響は破局的であろう。今や科学技術の開発使用にも節度が必要となった。その節度を探究するのが倫理学の課題である。そのために新たな生命観の探究確立が急務であろう。そこで本論では生命の問題に哲学的に本格的に取り組んだ数少ない哲学者の一人である西田幾多郎の生命観を考察し、生命観確立の一助としたい。

西田哲学と生命

「生命」の問題は西田幾多郎の哲学探究のモチーフであり、ベースであった。西田は「日記」に於て次のように述べている。

「学問は畢竟「我」の為なり、「I」が第一等の事なり、「I」なき学問は無用なり。急いで書物読むべからず。」(明治三五・二・二四)

「余は禅を学の為になすは誤りなり。余が心の為め生命の為になすべし。」(明治三六・七・二三)

「余はPsychologist, Sociologistにあらす「I」の研究者とならん。」(明治三八・七・一九)

このように西田の生涯を通しての思索の主題は「生命」なかんずく「自己の内なる生命」の自覚と哲学的把握、そしてその論理化にあつたとも言えるのである。

「我々は生理学的に自己が生きて居ることを知るのではない。生命は生命の自覚によらなければならない。」(『全集』Ⅱ「哲学論文集」第七、294)

デカルトは「我思惟す、故に我あり」と言ったが、西田は次のように言う。「我々の生きて居ると云ふことが思惟によつて我々に知られるのではなく、我々が生きて居るから思惟するのである。生命といふのは単に非合理的とか直接にして無媒介的とか云ふべきでなく、我々の生活には合理的媒介といふものが（思惟が）含まれていなければならない。何らかの意味に於いて合理的媒介を含まない人間の生命といふものはないのである。」

（『全集』XII「哲学論文集」第二 P.269）

西田の言うようにわれわれは思惟するから生きているのではなく、生きているからこそ思惟することもできるのである。具体的な思惟、現実的な真理の探究は生きているという事実、生命の具体的現実がベースでなければならぬ。

「具体的真理は具体的生命の立場から考えられるものでなければならぬ。そこに哲学といふものがあるのである。」（『全集』VIII P.269）

「哲学といふのは客観的対象の学問ではない、行為的直観の学問でなければならぬ。我々の生命の内容が哲学の対象となるのである。哲学的体系の底には、深い生命の直観がなければならない。」（『全集』VIII P.211）かくて生命こそ西田哲学の主題であり、アルファでありオメガであった、とすることができるのである。

生命と環境 われわれの生命は何処から来て、何処へ行くのであろうか。われわれの生まれ、生き、死にいく場所は「環境」である。

「生命なくして環境といふものはないが、環境といふものなくして生命といふものもない。生命が環境を変ずると共に、環境が生命を変ずるのである。而して我々が死するといふことは、環境に還つて行くことである。生れるといふことも、単なる無から有が出ると考へないかぎり、環境から生れ出ると考へなければならない。」「生命の生れ出る世界は、生命と環境が弁証法的に一つの世界でなければならない。」「生命は主体と環境との相互限定として、形が形自身を限定するより始まる。」（『全集』VIII P.283-4）

生命がこの世に生まれ出るためには、太陽があり、地球や大地や水や空気

などの自然や、民族や国家社会などの「環境」がなければならない。しかも環境は自己を消費し否定する対立物である生命をもって初めて環境として意味をもち環境たりるのである。生命と環境が弁証法的に、すなわち相対立矛盾しながらしかも統一され自己同一であるという弁証法的世界である。「環境」に於てのみ生命は存立することができるのである。

「環境」は「世界」「場所」「絶対現在」「弁証法的世界」「弁証法的一般者」「表現的世界」などとも呼ばれている。それは主体と環境、時間と空間、全体の一と個物的多、連続と非連続、生成と消滅、生と死との「絶対矛盾的自己同一の世界」である。かゝる世界ないし環境が絶対矛盾的自己同一的に自己自身を限定する所に生命が成立する、と西田は考へるのである。弁証法的世界は何処までも「逆限定を含んだ世界」であり、その絶対矛盾的自己同一的自己限定は「限定するものなき限定」である。この「矛盾的自己同一的な世界」が自己の内自己表現的要素を含み、現在が現在自身を限定する永遠の今の自己限定に於て「環境と生命が一」となり、矛盾的自己同一の形が形自身を限定し、世界が世界自身を形成する所に「生命」というものが現れるのである。

「我々の生命の世界と云ふのは、絶対現在の自己限定として、自己自身の中に自己を表現し、時間的に空間的に作られたものから作るものへ何処までも自己自身を形成し行く所に成立するのである。」（『全集』XI「哲学論文集」第七 P.423）

たしかに、われわれの生命は、時間と空間との絶対矛盾的自己同一的な場所、今・この絶対現在であるところの「環境」の中に、すなわち「弁証法的な世界」の中に「矛盾的自己同一的に」絶対否定である死を背負つて生まれ、環境に作られながら環境を作り、自己自身を形成しつゝ生き死んでいくのである。しかも生命は、何故、何処から来たのか、われわれには分からない。世界が自己自身の内に自己表現的要素を含み、形として自己自身を限定することによって生命を生みだしたとしか考へようがない。そして何が世界を生みだし形成したのか、それも分からない。世界の始源は「絶対無」であると言わざるをえないのである。まさに絶対無が自己自身を矛盾的自己同一

的に限定することによって、すなわち形をもつことにより世界と生命を生みだし形成し来たったとしか言いようがないのである。

「我々は多と一との絶対矛盾的自己同一の世界の個物として、此世界に生れ来る。多と一との絶対矛盾的自己同一の世界は何処までも作られたものから作るものへと無限なる発展の世界でなければならぬ。何処までも自己矛盾的に物質の世界から生物の世界へ、生物の世界から人間の世界へと発展し来たったのである。我々は宇宙の無限なる弁証法的発展の過程によって生れ来たったのである。」（『全集』Ⅴ P.110-1）

われわれの生命は弁証法的世界の自己限定の成果として、宇宙の無限なる弁証法的発展の過程によって、さらには生物の進化の結果として、この世界に生まれ来たのである。弁証法的世界が人間の生命をこの世界に創造したということとは、われわれ人間に何らかの課題を与えて生み出したのである。

「絶対矛盾的自己同一の世界に於て、我々に対して与えられるものと云へば、課題として与えられるものでなければならぬ。我々は此世界に於て或物を形成すべく課せられて居るのである。そこに我々の生命があるのである。我々は此世界に課題を有って生れ来るのである。」（同 P.180）

自己の生命のよって来たる所以を思い、自己の生命の意味と価値について考え、自己に課せられた課題ないし使命を探究し、その実現のために邁進することが、われわれ人間の生きる道なのである。そのためにはわれわれはまずなによりも自己の生命の存立の場であり、故郷であり、拠り所であるところの「環境」に対して大きな関心と配慮と感謝をもつべきであろう。われわれの主体と環境は絶対矛盾的自己同一な相互限定の関係にある。環境の汚染破壊はわれわれ人間自身の汚染破壊である。環境破壊の問題はわれわれ人類にとってまさに緊急の課題である。われわれは人間中心の観点から科学技術をもって環境を利用し管理し支配することのみをめざして来た。そして環境を汚染し攪乱し破壊して生存の危機に直面して初めて、環境あつての人間であること、人間も環境の一部分にすぎないことを認識せざるをえなくなつたのである。近年生態学が盛んに研究され、また人間と人間の倫理から環境

と人間の倫理を説く環境倫理学や生命圏倫理学が提唱されるようになったことも故あることなのである。

生物的生命 西田はホルデンなどの生物学の生命論やベルグソンなどの生の哲学の生命観を参照しながら自己の論理体系をもって独自の生命論を構築していく。

弁証法的世界は、歴史的生命、生物的生命、種の生命、動物的生命、人間的生命と種々の生命の形態を以て自己を限定し実現する。西田は生命は歴史的生命であり、歴史的生命は人間の生命が体现すると考え、人間の生命を中心に生命を考察していく。歴史的生命はまず生物的生命として自己を限定し顕現する。

「弁証法的世界は何処までも生物的生命として自己自身を限定する。我々の生命は何処までも生物的生命である。我々は親から生れる。親は又その親から生れる。我々の生命は種的である、而して外に絶対否定の環境を有つ。併し生物的生命は固、内に否定を含む歴史的生命の一面であり、我々は歴史的生命の個体として、主観を客観となし、客観を主観となすのである。」

（『全集』Ⅷ「哲学論文集」第二 P.289）

歴史的生命は内に「絶対否定」すなわち「死」を含む生命であり、かゝる絶対否定の肯定として生物的生命をもつのである。生物的生命は生むものとしての自然の形成作用によって産出される。自然は見つゝ造りいくのである。造ることが同時に見ることであり、その意味に於て「生命は造形美術的」でなければならぬ。（『全集』Ⅷ P.281）

生物的生命は「種」として自己を顕現し、「種」は生物的生命及び歴史的生命の基体として「種の世界」を形成する。

「世界は我々の死し行く所であり、生れ出る所である。時間即空間、空間即時間なる場所的限定として生命といふものが成立するのである。内に絶対否定を含む歴史的生命は、一面に絶対否定として、我々は絶対の死に面する、世界は死の世界である。かゝる絶対否定の肯定として生物的生命といふものが成立する、種の世界が成立する。」（『全集』Ⅷ「哲学論文

集 Ⅰ P. 301)

「種とは形成作用である、能動的に自己自身を維持する特殊な規準的構造である。歴史的生命は、その何処までも否定に面するといふ立場からは、無限なる生物的生命である。そこから無数なる種が形成せられると考へられる。」(同 P. 300)

「生物体とは世界の内の世界である。内と外との整合的に、即ち内的環境と外的環境との調和的に、種の形が形自身を維持する所に生命があるのである。」(『全集』XI『哲学論文集』第七 P. 321)

「多と一との絶対矛盾的自己同一の世界に於て、矛盾が解かれるかぎり、一つの種が成立するのである。行為的直観的なるかぎり、種的生命が成立すると云ふことができる。種も生命も既に弁証法である(概念的であるのである)。種によって個が生ぎ、個によって種が生ぎ、種によって種があるのである。」(『全集』X P. 139)

生物的生命は「種」として世界の内に独自の世界すなわち内的環境をもち、内と外との、多と一との、個と全との矛盾的自己同一的に、自己の形を形成、維持していくところに成立するのである。生命の本質は「絶対現在の自己限定として形作る」というところに、種の「再生(reproduction)」にあるのである(『全集』X P. 320)。かゝる種の時間と空間との、生と死との矛盾的自己同一的な活動の無限の過程、無限の持続が生命活動というものなのである。西田は分類学の基本的単位である種をこのように解し、論を進めていく。

個としての生命も多即一として、種に於ける個としてのみ個たり得るのであり、同時に個は一即多として種を体現しつゝ個として生きているのである。生命は個と種との矛盾的自己同一としてのみ存立する。環境ないし世界によって作られたものが作るものとなること、すなわち種の形成に於てのみ生命は成立し個体も存立しうるのである。

「環境が主体を変ずる、否、種が世界から生れると云ふことは、作られたものが作るものを作るといふことから可能となるのである。生命といふものは、いつも作られたものが作るものとなる所にあるのである。」(『全

集 Ⅲ P. 501)

「多即一即多の矛盾的自己同一として、弁証法的世界の自己限定として、生命といふものが成立するのである。個が生きているのではない、種が生きているのである。種の形成を離れた個は生きたものではない。」(同 P. 528)

「真の生命は唯、個体にあるのではない、私は親から生れ又私が子を生む所にあるのである、個体が個体から生れ、個体が個体を生む所にあるのである。それは個体が自己の外に物を作ることである。」(同 P. 529)

生命は、全体的一と個物的多との矛盾的自己同一として種が自己自身を限定する所に成立するのであるが、このことは生物体の細胞に於てよく顕現されている。

「我々の身体は無数の細胞から成立している。一つの生殖細胞の無限なる自己分裂から成長したものである。それは全体的一の自己形成と考へられると共に、細胞はそれぞれに独立性を有し、それぞれに生きたものである。細胞が生きているかぎり、全体が生きているのである。又その逆も真である。全体的一としての全体が自己自身を否定して、個物的多として細胞的に環境を自己に同化する。」(『全集』X P. 315)

「全体的一と個物的多との、主体と環境との、内と外との矛盾的自己同一的に、尾を噛む蛇の如くにして、生命と云ふものがあるのである。」(同 P. 316)

生命体の原点ともいふべき細胞は、個体の部分でありながらそれぞれ独立し、独自の生命活動をなし、分裂生成消滅しつゝ個体を形成維持していく。しかも個体が死んでも特定の条件の下では生き続けることができる。しかし細胞だけでは生命とはいえない。無数の細胞が矛盾的自己同一的に統一されて一つの全体としての個体を形成して初めて生命と呼ばれるものとなるのである。個体は内的環境である細胞に、外的環境、栄養や酸素を取り込むことによって生きている。そして細胞の始源は無である。まさに生命は細胞と個体、内と外、多と一、有と無、生と死との矛盾的自己同一的自己形成であり、種の自己限定として存立するといふのである。かゝる種の生命が「内に否定を含み、無にして自己自身を限定する歴史的生命」を形成し、歴史的世界

を構成していくのである。

「生命現象と云ふものは何処から考へられるか。それは形が形自身を形成すると云ふことから考へられねばならぬ。絶対現在の自己限定として、自己の内に自己を映すことによって自己自身を形成する世界は、形が形自身を形成する世界である。働くものが働かれるものとして、無基底的に、自己自身を限定する形に於て自己同一を有つ世界である。それは無限なる形の世界でなければならぬ。かゝる形が生命の形である。生命の種と云ふのは、かゝる形にはかならない。」（『全集』Ⅹ「哲学論文集」第六 P.52）

「形が形自身を形成する世界は生命的である。併し生物的生命的の世界は、未だ自覚の世界ではない。世界は人間の歴史的世界に於て自覚するのである。我々の自覚は歴史的生命の自覚に外ならない。」（同 P.56）

歴史的生命 弁証法的世界は自己を生物的命から歴史的生命へと限定し形成していく。それは生物が技術をもち、道具を作り、制作すること、すなわち行為することによって、作られたものが作るものとなることによつて行なわれる。

「生物が技術を有つ時、個が種の外に出る。それは既に単なる生物的生命ではなくして、否定の肯定の生命である。既に社会的生命の萌芽を含むのである。無論、生物が社会的となると云つても、その生物の種たることを失ふのではない。」（『全集』Ⅹ P.284）

「技術と云ふのは単に主観に属するものではない。我が物の中に入ることである。物の働きが私の働きとなることである。道具を有つ時、人間は既に歴史的世界に於てあるのである。」（『全集』Ⅷ「哲学論文集」第二 P.287）

「我々の自己は行為的でなければならぬ。行為する所に人間の存在があるのである。行為するといふことは、道具を以てものを作ることである。而して道具を有つと云ふことは、既に自分自身の中に何処までも否定を含む歴史的生命の世界に於て、自己自身を限定する個物として、可能なので

ある。」（同 P.295）

われわれは自己の内なる絶対否定によって自己を限定することすなわち行為すること、道具を以てものを作ること、技術をもち行使することによって、生物的生命から社会的生命、歴史的生命へと自己を形成し行くのである。

「生物的生命が歴史的生命となる時、すべて環境的なるものは道具的である。我々は生物的生命として、我々の存在は何処までも身体的なと共に、我々はすべての物を道具として有つ可能性を有つ。そしてそれは逆に物が我々の身体となると云ふことである。その極、我々の自己が道具的世界に入ると云ふこともできる。」（同 P.304）

われわれは技術を用い、道具を作り使うことによって環境を否定変革し、形成し、創造していく。それはわれわれが作られたものから作るものへと自己を形成し、さらに行為的直観的に世界を形成創造することである。このように弁証法的世界が自己自身を限定していくことが、形成作用的なる歴史的生命なのである。

「環境が我々の死し行く所であり生れ出る所である時、即ちそれが世界である時、生命の独立性がある。そこに生命の具体的実在性がある。故に具体的生命は歴史の命であり、社会的である。生物の種は民族となり、ゲマインシャフトとなる。」（同 P.288）

生物的生命が種に於てあるように歴史的生命は「社会」に於て社会的生命として成立する。生物的生命が身体をもつように歴史的生命は歴史的身体即ち社会をもつのである。

「私と汝との人格的対立も、社会的発展から出て来るのである。子供の自己意識は、社会的関係から発展するものでなければならぬ。社会といふものが、矛盾的自己同一の現在の自己形成として成立するものなるが故である。生物的生命には、矛盾的自己同一的形成として生物的身体即ち所謂身体といふものがある如く、歴史的生命には行為的直観的に歴史的身体即ち社会といふものがあるのである。」（『全集』Ⅹ P.186-7）

「我々の世界は、個物相互限定的世界として形成的である。それは生物的

生命的と考へられる。併し何処までも多と一との相互否定的な矛盾的自己同一の世界として、それは社会的でなければならぬ。社会に於ては、作られたものが作るものから離れ、それ自身に於て独立なものでありながら、逆に作るものを作る。かゝる矛盾的自己同一に於て、社会の实在性があるのである。社会的形成がイデオラのといふ所以である。人間は社会的動物と云はれる。個人は社会を映すことによつて個人であり、社会は個人を自己のベルスペクティブとなすことによつて社会であるのである。而して作られたものから作るものへと歴史的生産的なる所に、個人が真の個人であり社会が真の社会であるのである。要するに社会が矛盾的自己同一的に世界の種的形成といふ性質を有するかぎり、生きた社会であるのである。多と一との絶対矛盾の自己同一の世界の形成作用として、絶対の影像を宿すかぎり、それは道德的实在であるのである。故に歴史的事実として、社会は何等かの宗教的信念を以て始まる（例えばデュルケームのサクレの如く）。それなくして社会は成立せぬ。」（同 P.120-1）

歴史的生命は社会に於て個人として客観的表現の媒介によつて、作られて作るものとして無限に形成作用的なところに、すなわちものを作るというところに、個人と社会が矛盾的自己同一的に歴史的生産的なるところに、その特質を有するのである。

「我々の歴史的生命は客観的表現によつて呼び起こされるものでなければならぬ。我々の生命は客観的表現によつて媒介せられるものでなければならぬ。客観的表現によつて媒介せられない生命といふものはないのである。絶対に超越的なるもの、絶対無を媒介として創造的に現われるものが客観的に表現的であるのである。」（同 P.15）

われわれはかゝる歴史的生命としての形成作用の自己形成的器官として「身体」をもつ。われわれの身体は自己表現的に自己自身を形成する歴史的世界の器官として「歴史的身体的」である。「生きると云ふことは、感情とか神秘的直観とかにあるのでなく、客観的製作にあるのである。我々の生命が身体的と考へられる所以である」（同 P.20）。われわれの自己は、世界の自己表現的要素として、歴史的身体的に、行為的直観的に、世界の自己表

現の内容を把握し、歴史的身体的に歴史的世界を形成するのである。われわれの身体は「云はば世界精神の道具である」のである。

「我々は自己矛盾の实在である。是に於て、我々は道具を有つ。而して外に道具を有つといふことは、逆に我々の身体を道具として有つといふことである。無論、それは自己といふものが意識的であつて、単に身体を道具として有つといふことではない。個人的自己、實在の自己は、何処までも身体的である。我々は身体的實在なると共に、身体を道具として有つのである。故に我々の行為はすべて表現作用的性質を有つ。我々の行為は、表現的に自己自身を限定する歴史的事在の世界的個物的限定として成立するのである。」（『全集』Ⅷ P.299）

「身体は何処までも機械である。部分の部分までも無限に機械である。斯く云ふことは、身体と云ふ機械は中に全空間の自己表現的要素を含んで居ると云ふことでなければならぬ。内と外との矛盾的自己同一的に、無限に創造的と云ふことでなければならぬ。そこから身体的に外に物を作る。道具を有つと云ふことも出て来るのである。故に何処までも身体的に外に物を作る、物を支配する、物を道具として有つ、物を身体化すると云ふことは、身体が自己自身の内に何処までも全世界の自己表現点を含むと云ふことであり、無限に全体の自己表現点として、何処までも創造的に、自己自身の内に入ることである。故に我々の身体に於て、外に出ることは内に入ることであり、内に入ることは外に出ることである。真に自己自身に入ることは、自己が自己を失ふことである。我々の身体はいつも内へと外への両方向を有つ、矛盾的自己同一的存在である。我々の自己は、空間と時間との矛盾的自己同一的結合点であるのである。世界の創造に繋ると云ふことができる。故に空間的なる身体と時間的なる自己と相反する両方向にあるものでありながら、自己なくして身体と云ふものなく、身体なくして自己と云ふものはない。」（『全集』Ⅷ P.306）

「我々の身体的組織そのものが、固、情緒的に自己表現的であるのである。併しそれは、我々の身体が内に世界の自己表現的要素を含むと云ふことに他ならない。我々の身体的生命は、世界の自己表現的要素としてロゴスの

であるのである。世界の自己表現的形成の内容が理性的と考へられるものである。(略)故に私は我々の身体を歴史的身体と云ふ。何処までも自己の内に自己を表現し、自己表現的に自己自身を形成する世界が歴史的世界である。我々の身体は、かゝる世界の自己形成の器官として歴史的身体的であるのである。」(同 P.310-1)

動物の身体もまた世界の表現点として歴史的身体的である。しかし動物は歴史的生命の自覚に達していない。人間のみが歴史的生命としての自覚をもちうるのであり、真の意味の行為をなすことができ、行為的直観的たりうるのである。しかして人間の身体は単に身体ではなくして歴史的身体的であるのである。近年デカルト以来の理性中心の物心二元論が反省され、身体を単に物質としてのみ見る身体観が反省批判されるようになった。また言語の検討批判から、身体は言語以上に内的な自己表現の可能性をもっていると思なされるようになり、さらに医学の面からも神経症などの研究から心とからだの相互関係が認識検討されるようになった。東洋では元來物心不二、心身不二の観点に立っているが、西田の身体論は両者を批判的に総合しようとしているように思われる。われわれ人間の身体は、一面では物であり機械である側面をもつが、内に世界の自己表現的要素を含んでいるかぎり、自己を道具となし、物を道具として、ものを技術的に製作し創造する。われわれの身体が世界の自己形成作用の表現点として製作表現する時、身体はわれわれの自己であり、自己の身体の働きは行為的直観的であり、歴史的身体的なのである。ここにおいてわれわれの生命は歴史的生命として、われわれの自己と身体、精神と身体は、矛盾的自己同一的であり、不二の關係にあるのである。歴史的生命に於ける自己と身体、精神と身体の關係を最もよく顕現しているのが「行為的直観」である。

「ホルダーンは生物学の公理は生命の直覚にあると云ふが、社会科学の公理は技術的身体的生命の行為的直観にあると云ひうるであらう。」(『全集』N P.281-2)

「行為的直観が我々の歴史的生命の根本的操作であるのである。」(同 P.283)

「行為的直観とは我々が自己矛盾的に自己を世界の中に置いて見ることである。」(同 P.292)

「作られたものから作るものへとして社会の矛盾的自己同一と云ふのは、考へられたものではなくして、我々の事実でなければならぬ。我々はそこから考へるのである。(略)絶対矛盾的自己同一として作られたものから作るものへといふ世界は、逆に我々の生命の自覚の世界である。我々が行為的直観的に即ちポイエシス的に物を見る所に、歴史的现实があるのである。」(同 P.286-7)

「行為的直観」とは抽象的な觀念の操作ではなくして、われわれの生命の事実の、矛盾的自己同一的な社会の現実の、弁証法的世界の表現活動としての歴史的现实の、具体的概念的な直観的体験的把握、具体的世界の弁証法的把握、矛盾的自己同一的認識のことであり、それはヘーゲル・マルクスの弁証法的認識と仏教の般若空観の体験的直観的認識を総合したもののようと思われる。要するに生の現実そのものの中に自ら飛び込み、現実の形成作用そのものと一体化し、自己の身体全体で歴史的身体的に体得すること、しかも単なる直観ではなく概念的な具体的把握、働きながら観ること、作りながら観ること、行為そのものに於ける認識をいうのである。

「我々は行為によつても物を見て行くのである。それが行為的直観である。働くことが見ることである。」(『全集』Ⅲ P.345)

「私(西田)の行為的直観といふのは、極めて現実的な知識の立場を云ふのである。すべての経験的知識の基となるものを云ふのである。経験的な、あまりに経験的な知識の立場を云ふのである。」(同 P.541)

「我々人間が行為的直観的に物を見ると云ふことは、その根柢に於て我々は個性的に自己自身を構成し行く世界の個性的要素として物を見ることである、個性的なるものを媒介として物を見ることである。事実的なるものは、かゝるものとして我々に対するのである。種から生れる我々は、自己矛盾的に物を見るのである。作られたものから作るものへ、断絶の連続として、それは意識的でなければならぬ。我々は単に感官的に物を見て、見るのではない、主体的に捉えて居るのである。故に歴史的社会的である。」

(同 P. 555)

「行為の立場といふのは、内が外であり、外が内である、時間的なるものが空間的であり、空間的なるものが時間的であるといふことである。而して我々は行為によって物を見、物が我を限定すると共に我が物を限定する。それが行為的直観である。我々が経験を知識の基本と考へなければならぬといふのも、経験といふのがかゝる意味に於ての行為的直観なるが故である。」(『全集』Ⅲ「哲学論文集」一 P. 131)

「弁証法的世界といふのは行為的直観の世界である。我々が行為によって物を造る、併し物は我によって造られると共に我を離れたものであり、我々を限定するものである。加之、物は物自身から生ずるものであり、物は自然である、而して我も物であり、我々の行為も物の世界から生れる。行為的直観の世界といふのは此の如きものでなければならぬ。それが我々の世界と考へるものである。かゝる世界に於ては物は身体的に自己自身を限定する。身体的限定の根柢に於ては、エラン・ヴィタル的なものが考へられねばならない。弁証法的世界は無限なる生命の流れとして自己自身を限定すると云ふことができる。」(同 P. 129)

われわれの手は行為的直観というをよく顕現している。われわれは手でつかみ、触り、ものを製作することによって物の実態を把握することができる。「手は多と一との矛盾的自己同一として形作ることによって理解する行為的直観の器官であるのである。」(『全集』Ⅳ P. 300) 手を用い、ものを認識し製作することが人間の特長であるのである。

「歴史的生命の世界は、作られたものから作るものへの極限に於て、個性の構成を中心として動いて行く。世界は個性的に自己自身を構成する。我々は個性的世界の個性的要素として理性的であるがぎり、創造的である。(略)それは作られて作るものの頂点として、人間が自己を創造者と考へることである。作られたものから作るものへと動き行く世界の極限に於て、作られて作るものの頂点として人間といふものが現はれるのである。」(『全集』Ⅳ「哲学論文集」第三 P. 53)

かくて弁証法的世界の矛盾的自己同一的自己形成の頂点として人間的生命

が出現する。

人間的生命

「作られたものから、作るものへと、矛盾的自己同一に徹することによって、歴史的世界は生物の世界から人間の世界へと発展する。歴史的生命が自己自身を具体化するのである。世界が真に自己自身から動くものとなるのである。かゝる自己矛盾の極限に於て人間生命に達するのである。」(『全集』Ⅳ P. 335)

作られたものでありながら作るものへと自己を形成し、作られて作るという矛盾の極に於て、行為的直観的に世界の自己表現の内容を把握し、技術や道具を用いて歴史的身体的に歴史的世界を表現形成し製作創造する、すなわち弁証法的世界の自己形成を自覚的に背負い実現していくところに、人間の生命たる所以があるのである。ここに歴史的生命の頂点としての人間生命と生物的生命との相違があるのである。もちろん人間も動物である、しかしたんに動物ではない。

「動物の身体は、真に内に世界の自己表現点を含むに至っていない。真の生命の根元を含んでいない。故に動物は自覚的自己を有たない。動物は道具を有たない。かゝる非自覚的なる生物の精神が魂と考へられるものである。而してその働きが本能である。人間も本能的である。併し人間に至って、表現せられたものが表現するものとして、生命が生命自身に返るのである。世界が世界自身を自覚するのである。実在が自己自身を表現するのである。」(『全集』Ⅳ「哲学論文集」第七 P. 309)

人間生命と動物生命とは弁証法的に逆対応の関係にあり、具体的生命はいつもこの中間に、弁証法的関係に於てるのである。

「我々の生命は動物的生命より発展し、如何に動物的生命を否定すと云つても、動物的生命を一つの極として有つのである。又動物の生命は人間生命を一つの極として有つことによって、それが生命であるのである。人間は動物の単なる発展だと云ふのではない、一つの極であると云ふのである。此の如き意味に於て、人間生命と動物生命とが対立する。具体的生命はいつも中間にあるのである。歴史的生命は絶対否定によって媒介せ

られるものとして、断絶の連続としていつも中和面を有つ。」（『全集』
N. P. 24）

かくて人間の生命の特徴は道具を作り使用することによって製作創造し、世界の自己表現的要素として、世界の創造的根源と結合するところにあるのである。

「道具を作るところに、我々の生命の事実がある。而して外に物を作ることは、内に深くなることである。全体の自己表現的要素としての自己が、何処までも全体の自己表現点、世界の創造的根源と結合することである。すべて発展とは、その根源に返ることである。生命は人間の生命に至って生命の根源と結合する。」（『全集』N. P. 308）

われわれは自己を歴史的世界の表現的作用の自己表現点として自覚する。そこに於てわれわれは「個」であるのである。内に媒介し個を個たらしめるものは「社会」である。

「人間の生命に於て、個が真に自立的であり、多の一として真に生きると云ふことができる。個は製作的である。我々は細胞作用に於て生物的生命を有つが、人間の生命をば製作作用に於て有つのである。かゝる個を内に媒介するものは、単なる生物的種ではなくして、歴史的種である、社会であるのである。」（『全集』VIII. P. 530）

人間が「自由」であるのも、人間が表現的、製作的、創造的なるが故である。

「作られて作るものの頂点として創造的であるかぎり、人間は理性的であり、自由であるのである。」（同 P. 57）

「我々は創造せられ創造するものなるが故に、単に対象界に束縛せられない、即ち自由と考へられるのである。」（同 P. 306）

われわれ人間の生命は弁証法的世界の「個」として、作られて作るものであるかぎり、表現製作的であるかぎり、時を超え、自由であり、永遠なるものに通するのである。

永遠の生命 弁証法的世界の絶対矛盾的自己同一的自己限定の産物で

ある人間の生命は自己成立の根底に於て内に否定を含み「矛盾の自己同一」として存在する。「生命は何処までも不調和の調和といふ所にあるのである。健康の中に病気が含まれて居る、生命の中に死があると云ふ所以である。」（『全集』N. P. 100）。生命の矛盾は人間に至ってその極に達する。矛盾の同一としてのわれわれの心が分裂、葛藤相克することは根源的な苦悩である。「我々の心は、本来、神と悪魔との戦場である」。われわれの自己が自己の絶対的な否定である老・死に直面することは、大いなる悲哀であり絶望である。しかも人格としてのわれわれの實在の根拠は、実にここにあるのである。（『全集』N. P. 405）

「人生の悲哀、その自己矛盾と云ふことは、古来言舊された常套語である。併し多くの人は深く此の事実を見詰めていない、何処までも此の事実を見詰めて行く時、我々に宗教の問題と云ふものが起つて来なければならぬのである。」（同 P. 394）

「人間の世界は単なる苦楽の世界ではなくして、喜憂の世界、苦悩の世界、煩悶の世界である。我々の自己の貴き所以のものは、即ちその悲惨なる所以のものである。」（同 P. 427）

絶対否定に面することによって、われわれは自己の永遠の死を知る。永遠の死は永遠の無に入ることである。ゆえに自己の生は一度的、唯一的であり、個である。しかしそこに真の自己、真の人格がある。そして自己の永遠の死を知る者は、自己の死を超え、永遠の生に於てあるのである。自己の死を知り、超えることは、無にして有と云ふことであり、矛盾の極致である。

しかしそこにわれわれの真の自覚的自己がある。矛盾的自己同一的自己が自己の根源に徹することにより、われわれの自己は、「自己の根底には何処までも自己を超えて、而も自己がそこから考へられるものがある」ということを自覚する。それは「心靈的事実」ないし「靈性的事実」と言いうるものである。「自己自身を超えたものに於て自己の生命を有つ所に、人間といふものがある」のである。かくて、われわれは死すべきものでありながら、「念々に生死して而も生死せない生命」「生死即涅槃」の「永遠の生命」を生きていることができるのである。（同 P. 395-427）

われわれの自己は、意志的人格のなればなるほど、矛盾的自己同一的に絶対否定に面する、絶対的一者に対する、すなわち逆対応的に神に対するのである。これゆえにわれわれの自己はその生命の根源に於て、何時も絶対的一者、神との対決に立ち、永遠の死か生かを決すべき立場に立っているのである。われわれの自己が唯一個的に意志的の自己として絶対者に対する時、絶対者は「何処までも背く我々の自己を、逃げる我々の自己を、何処までも追いつ、これを包むもの」すなわち「無限の慈悲」であるのである。「何処までも自己自身に反するものを包むのが絶対的爱」である。意志的の自己矛盾的存在たるわれわれの自己は「自己の生命の根底に於て、矛盾的自己同一的に自己を成立せしめるもの」に撞着する。「そこに我々の自己は自己自身を包む絶対的爱に接せなければならぬ」。愛なくして創造というものはないのである。

「無難禪師は生きながら死人となりてなり果てて心そのままにする業ぞよきと云ふ。かゝる立場に於て、我々の自己は絶対現在の自己限定として、真に歴史的世界創造的であるのである。」(同 P.435-7)

「宗教的意識と云ふのは、我々の生命の根本的事実として、学問、道德の基でもなければならぬ。宗教心と云ふのは、特殊の人の専有ではなくして、すべての人の心の底に潜むものでなければならぬ。此に氣附かざるものは、哲学者ともなり得ない。」(同 P.418)

「宗教を否定することは世界が自己自身を失ふことであり、逆に人間が人間自身を失ふことであり、人間が真の自己を否定することである。何となれば、人間は、固、自己矛盾的存在なるが故である。故に私は真の文化は宗教的でなければならぬと共に、真の宗教は文化的でなければならぬ」と云ふのである。我々は真の文化の背後に隠れた神を見るのである。世界が自己自身を喪失し、人間が神を忘れた時、人間は何処までも個人的に、私欲的となる。その結果世界は遊戯的か闘争的かとなる。すべてが乱世的となる。文化的方向はその極限に於て、真の文化を失ふに至るのである。」(同 P.459)

おわりに 以上見てきたように、西田幾太郎の生命観は当時の生物学の研究成果をふまえて、ベルグソンなどの生命論を参考にしつつ、ヘーゲル的、マルクスの弁証法の論理と、禅の体験より来たる仏教的思索ないし思想との対質によって形成された独自の生命観である。西田の説くように、われわれの生命は絶対無とも言いうる宇宙ないし弁証法的世界の絶対矛盾的自己限定によってこの環境の中に生みだされた、内に絶対矛盾ないし絶対否定を含む、すなわち作られて作るものとして、生かされて生きるものとして、しかも死すべきものとして、今・此処・此の場所・此の世界に於て生存しているのである。このことを深く自覚する時、われわれは自己を包み生かす、自己を超えた大いなるもの、絶対的一者の存在と絶対的な愛に思い至らざるをえない。歴史的弁証法的世界ないし環境なくして生命は生存することはできない。にもかかわらずわれわれはこの厳然たる事実を忘れ環境破壊を繰り返し、生存の危機に面してようやく環境の問題に気づき目を向けるようになった。人間と環境の問題の解決は現代における最も深刻な緊急の課題である。

また人間の生命だけが生命なのではない。生物的生命ないし動物的生命があつて初めて人間の生命も存立できるのである。われわれ人間はこの矛盾的自己同一的な生命の事実を絶対的に無視してはならない。しかし一方では人間は、動物的生命の極として人間の生命ないし精神的靈性的生命をもつ。自己の内なる絶対的否定、絶対的矛盾に気づき、自己の有限性を自覚し、自己の悲惨悲哀を実感して、自己を超え自己を包み生かす大いなるものの存在に思いを致し、そこに自己の存在の根元を見出すところに靈性的存在としての人間の生命の意義があるのである。今われわれ人間はこの事実を忘れ動物的生命にのみ執着して、生命を量的に功利的にのみとらえ、生命の質の問題を忘失し、我執我欲の虜となりあまりにも独善的享乐的で傲慢になりすぎているのではなからうか。

たしかに人間は作られて作るものとして、製作創造するものとして道具を作り技術を発達させて高度の文化文明を築いてきた。しかしわれわれ人間が文明の成果に溺れて自己の能力を過信し、自己の内なる絶対否定ないし有限性を度外視し、われわれを生み生かす大いなるものの存在を忘却し、傲岸不

遜独善専横となる時、すなわち生命への畏敬の念を忘れ、真の意味の宗教心を喪失した時、西田の示唆するように、人間は真の自己を否定喪失し、真の文化を失い、世界が世界自身を失うことになるであらう。まさに神の業とも言うべき生命の創造と終焉に、人間が割り込み、神に取って替わらんとする生命操作の技術の開発乱用は、人間が人間自身を喪失し、世界が世界自身を失い、人類と世界が滅亡する破局への道とならないであらうか。

「自由といふもののない所に、人間はない。併し人間が徹底的に自由になろうとすればする程、絶対の鉄壁に打当たる。人間が真に人間であらうとすればする程、人間は危機の上立つのである。そこまでに至らない人間は、嚴格には酔生夢死の動物の域を脱したものでない。故に人間は最も神に背く所に、最も神に近づいて居ると云ふこともできる。人間が人間自身を否定する所に、真に人間の生きる道があるのである。私はここに真の理性といふものを考へるのである。」

（『全集』Ⅳ P.56）

わが心深き底ありよろこびも憂いの波もとまかじと思ふ

（『全集』Ⅳ P.437）

老いの身をいつにおかむさすらひの旅にも似たりあはれ人の世

（同 P.440）

【原典・参考文献】

- 『西田幾多郎全集』（全一九卷）安倍能成他編 岩波書店 一九五〇
 『アンティゴネー』ソポクレース作・呉 茂一訳 岩波文庫 一九六一
 『西田幾多郎』中村雄二郎著 岩波書店 一九八三
 『西田幾多郎』（「日本の名著」四七）上山春平編 中央公論社 一九七〇
 『西田幾多郎集』（「近代日本思想体系」一一）竹内良知編 筑摩書房 一九七四
 『西田・三木・戸坂の哲学―思想史百年の遺産』宮川 透著 講談社現代新書 一九六七
 『ベルグソン』（「人類の知的遺産」五九）市川 浩編 講談社 一九八三
 『デュルケーム』（「人類の知的遺産」五七）作田啓一編 講談社 一九八三
 『生命の七つの謎』ガイ・マーチー著・吉松広延他訳 白揚社 一九八六
 『生命学への招待―バイオエシックスを超えて』森岡正博著 勁草書房 一九八八
 『生・老・病・死の倫理―仏教の死生観』田路 慧著 勁草書房 一九八八
 「岡山県立短期大学研究紀要」第三三卷第二号 一九九〇

平成二年八月二十二日 受付
 平成二年九月二十七日 受理